

デジタルとディジタスとの落差について
digital 化による指 digitus の感覚鈍磨の促進という矛盾に関する覚え書き

「デジタル」と聞くと、今日では「アナログ」の反対語という感覚が強い。そしてデジタル化の進行こそが人類文化発展の指標であり、いまや「アナログ人間」といえば「旧式」「時代遅れ」の代名詞だ。ひょっとすると「旧人」ネアンデルタール人と「新人」クロマニヨン人とを分けた分岐点に匹敵する人類史の分かれ目が digital divide なのかもしれない。この言葉は、コンピュータやインターネットへのアクセスのある種族と、そうではない種族とを分ける分岐線を指す。液晶のデジタル時計やデジタル表示映像の出現・普及を幼少の時に体験した世代が、今や四十代半ばに達している。遠距離映像受信がデジタル地上波に統一されるのも、目前に迫った。

だが、そもそもデジタルとは何を意味していたのだろうか。Digital という形容詞は digit という名詞に由来する。Digit とはアラビア数字では 0 から 9 までの十の数字を指す。十進法の数字体系は今日の人類にほぼ普遍的に行き渡っているが、この選択そのものには数学的必然性はない。たまたま人類の手の指が十本からなっており、指おり数を数えたことが十進法の成立要因だったと、一般に推測されている。フランス語の dix は数字の 10。これはラテン語の digitus つまり「指」doigt に由来するが、digit という言葉がフランス語に入るのは、ロベール辞典によれば、ようやく 1968 年のこと。情報学の用語として、今から 40 年前に英語経由で取り込まれた。

コンピュータ用語だというので、デジタルとは二進法 binary のことと思う向きが少なくない。だがこれは短絡。digital とは、十本の指のように個々別々で分別的 discrete な様相を指す。analog がギリシア語の analogos、つまり類比 proportionate という連続的な変化概念であるのと、対比される。bit も 1960 年代の造語で、binary digit の縮約形。2 項対立の 0/1 の対で、2 の 8 乗が byte と表記され 256 の区分を含む。2 の 16 乗は 65,536。「婿の権三郎」と覚えなさい、とコンピュータ学習世代は習ったかもしれない。そんなこと、誰でも知ってらァ--という若い読者の声が聞こえてきそう。

だが、digital がデジタルと訳されて、見失われたものがある。10 本の指を駆使して世界に働きかけ、指の感触を頼りに世界との接触面を彫琢する訓練。ヒトがヒトとなるために必須の触覚 tactile 体験が、デジタル化の掛け声のなか、教育の現場でも、社会人の日常でも、この半世紀に著しく荒廃した。この沙漠化に取って代わったのが仮想現実 virtual reality による脳内汚染ではなかったか。

デジタル技術によるヴァーチャル・リアリティーの普及とは裏腹に、人類はその指が潜在的に宿していた可能性 digital virtuality を喪失しつつある。アンドレ・ルロワ=グーランは、すでに半世紀近く前に『身ぶりと言葉』(原著 1964、荒木享訳、1973、現在絶版)において、この喪失が、まだ人類としてではないにせよ、すでにヒトの個体の水準における退化 dégénérescence の徴候だと、警鐘を発していた。

十指による手技を復活し、それを 2 進法の覇権から奪回すること。ここに、二元論的な量的世界観から触覚的な質的世界を救出するために残された数少ない回路のひとつがある。指の造形力としての digital。その再発見が、人類の潜在性回復のために、近い将来不可欠の課題となるだろう。

* 第 14 回日韓美学会(神戸女学院大学、2008 年 2 月 9 日)での口頭報告に基づく。ご招待いただいた濱下昌宏先生に謝意を表す。